

バードリサーチ

鳥類学大会2022

... JBRA ...

Ornithological Conference 2022

講演要旨集



目次

1. はじめに	p02
2. 大会概要	p03
3. 参加方法説明	p04
4. スケジュール	p09
5. プログラム・講演要旨	p10
6. 広告・出店者紹介	p33

1. はじめに

バードリサーチは、全国の会員と共に鳥類の生息状況などのモニタリングを行うと共に、鳥類学の発展のために、様々な活動を行っています。

新しい方法で鳥の世界を見せてくれる研究や鳥の保全に関係する研究には多くの人が心を動かされます。また、マイフィールドでの地道な記録の積み重ねや、そこから得られるインスピレーションもとても大事です。

そこで、バードリサーチでは、鳥類の調査や研究成果について、オンラインで学会形式の発表や交流の場を設けることにいたしました。いろいろな立場で研究をする人、調査研究に興味をもつ人、研究成果から学びたい人など多様な人が鳥の調査や研究について、気軽に見聞きしたり議論したり、仲間を増やしたりできる場を提供します。

大会名称：バードリサーチ鳥類学大会 2022

大会英語名称：JBRA Ornithological Conference 2022

会期：2023 年 1 月 7 日（土）、8 日（日）

主催：特定非営利活動法人バードリサーチ

協賛：一般社団法人ヒマラボ

大会運営スタッフ：

この大会はボランティアの皆さんのご協力により運営しています。

参加・発表受付担当：植村慎吾

参加者名簿作成担当：小杉美樹

発表要旨・発表ファイル掲載担当：野村佳那子 植村慎吾

口頭発表者事前接続テスト担当：天野孝保

口頭発表ライブ配信担当：植村慎吾

口頭発表司会進行：天野孝保 大橋美幸 加藤義清 山崎優佑 植村慎吾 高木憲太郎

口頭発表質問対応：天野孝保 石田健 三上かつら 山崎優佑 植村慎吾 高木憲太郎

ポスター発表会場設営担当：大坂英樹 高木憲太郎 植村慎吾

ポスター会場 寄付受付担当：野村佳那子 高木憲太郎 / クイズ大会担当：田村久美子 高木憲太郎

ポスター会場イラスト担当：カトウアヤコ / ポスター会場誘導担当：ボランティアの皆さん全員

写真提供：（講演要旨集 表紙）野間修一 （Web サイト）渡辺美郎

英名大会名題字作成担当：黒沢令子

講演要旨集作成担当：堀誉将 高木憲太郎

企画・発表方法検討・サイト作成・広告出店・連絡調整担当：高木憲太郎 植村慎吾



本大会は一般社団法人ヒマラボより協賛をいただいています。

一般社団法人ヒマラボは「市民の探究心や研究的な姿勢を涵養し、好奇心の毀損されない、市民自ら新たな知を生み出す「創造社会」の実現」を目的に掲げており、本大会の取り組みがその目的と合致していることから協賛いただきました。

2. 大会概要

口頭発表 [YouTube]

12分発表+5分質疑です。PowerPoint、Keynote、PDFで作成したファイルをZoomの画面共有を使って発表します。映写する画面のサイズは16:9を推奨しますが、4:3でも発表は可能です。聴講はYouTubeを使用し、質疑はYouTubeのコメント欄を使用します。

ポスター発表 [oVice]

ポスターはPDFで作成してください。PowerPointやKeynote、Canva、googleスライドなどを使って横長スライド6~10枚程度にまとめ、PDF化したものを準備してください。スライドは縦に並んで聴講者に表示されます。対面開催の学会発表用などにA0サイズで作成したポスターがある方は、それをPDFにしたものでもOKです。ファイルサイズはあまり大きくならないよう調整をお願いします。10MB以下が理想です。

会場にはoViceというバーチャルオフィスサービスを利用します。oVice上で質疑ができるコアタイムは各2時間です。現地開催のポスター発表に近い雰囲気を感じてください。

広告掲載・出店ブース [oVice]

鳥に関するグッズを扱うお店や調査器材のメーカーや代理店から広告の掲載とブース出店があります。ぜひ、各店舗のリンクをたどり、オンラインショッピングをお楽しみください。ポスター会場にブース出店のある店舗は、商品の説明を見たり聞いたりしながら、相談ができます。

前夜祭 [oVice]

大会前日の夜にポスター会場を公開します。この機会にoViceの使い方に慣れていただけたらと思います。近づいて話す、声でのコミュニケーションをお楽しみください。

自由集会 [Zoom]

演者を呼んで発表と議論がしたいというニーズに応えるため、テーマトークセッションの時間に、自由集会枠を設けます。企画者が1~数名の演者を呼び、講演を軸に、質疑やディスカッションをする場です。枠は2時間です。

懇親会 [Zoom]

最初の30分はランダムに割り振られたZoomのブレイクアウトルームで自己紹介を交えながらご歓談ください。その後は、自由にルームを移動して話したい人と交流を深めてください。

表彰 [YouTube]

今大会ではポスター発表について以下の2つの賞を設けます。いずれの賞も、参加者全員による投票によって決定します。ポスターをヒマラボ賞の対象とするかは、自己申告によります。

- 1) 最優秀ポスター賞 (JBRAOC2020online Poster session Golden Bird Award)
- 2) ヒマラボ賞 (JBRAOC2020online Poster session Himalab Award)

3. 参加方法説明

口頭発表の見方・質問の仕方

口頭発表は、限定公開ページにライブ配信される動画を視聴していただきます。

質問は YouTube のコメント欄＝チャット欄を使用します。ここに記入された質問を、質問対応スタッフがピックアップして、講演者に口頭で質問を伝えます。YouTube に配信される映像は実際よりも数十秒のタイムラグがありますので、質問は早めに記入していただくようお願いします。

コメントを書き込むために YouTube (Google) のアカウントが必要です。大会参加前にアカウントを取得しておいてください。アカウントは複数持つことができるので、普段使っているアカウントを使用したくない場合は、別アカウントを取得しておいてください。



質問の記入には、Google アカウント＝Gmail アドレスが必要です。

詳しくはバードリサーチ作成の Zoom 利用マニュアル

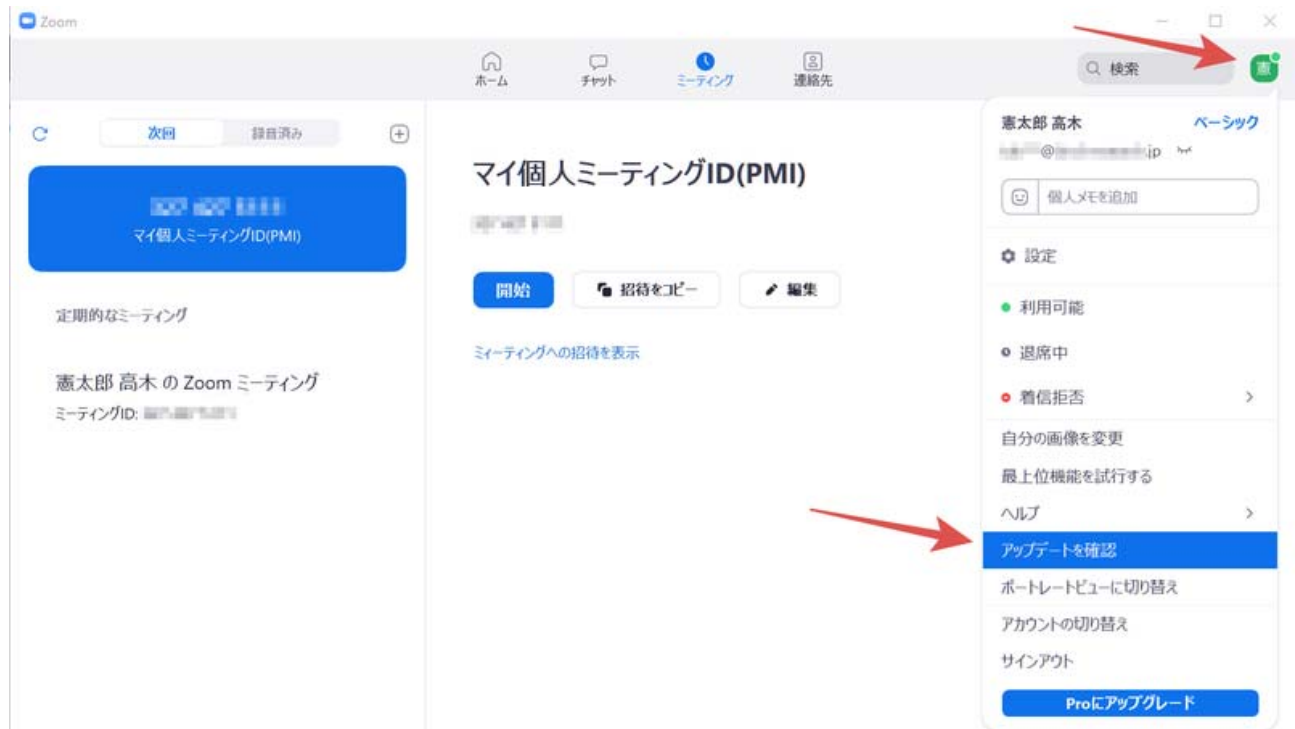
https://www.bird-research.jp/1_event/jbraoc2022/Zooming-manual2022_byBR.pdf

の 15 ページ以降に YouTube (Google) のアカウントの取得方法などの説明があります。

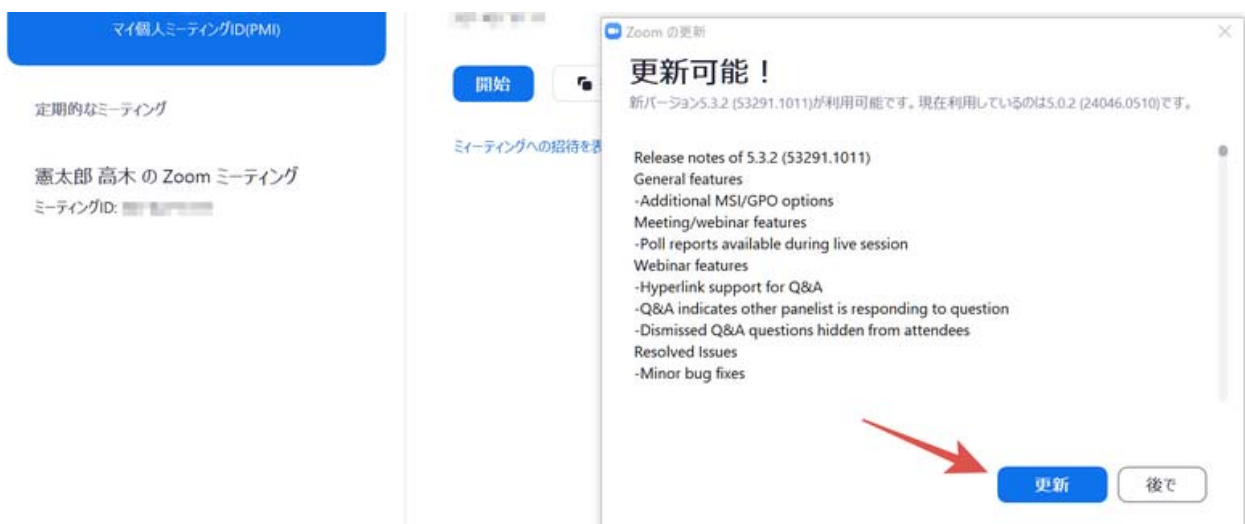
こちらを参照してください。

Zoom のアップデート確認方法

Zoom の安全性については、2020 年春の段階で、たくさん指摘されていました。しかし、その後のバージョンアップで改善が図られたようです。セキュリティの向上のため、参加される際は、最新版にアップデートをお願いします。



アップデートの確認は、アプリを起動して画面右上のアカウントアイコンをクリック！そして、プルダウンメニューから「アップデートの確認」をクリックしてください。



しばらく待って、「更新可能！」のウィンドが開いたら、青い「更新」ボタンをクリック！これで最新版にアップデートされます。

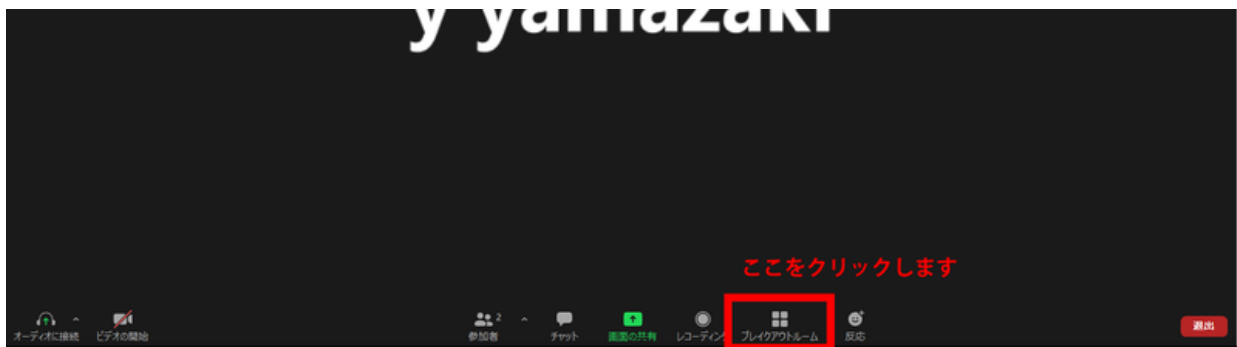
詳しい Zoom の利用方法は下記バードリサーチの Zoom 利用マニュアルをご覧ください。

https://www.bird-research.jp/1_event/jbraoc2022/Zooming-manual2022_byBR.pdf

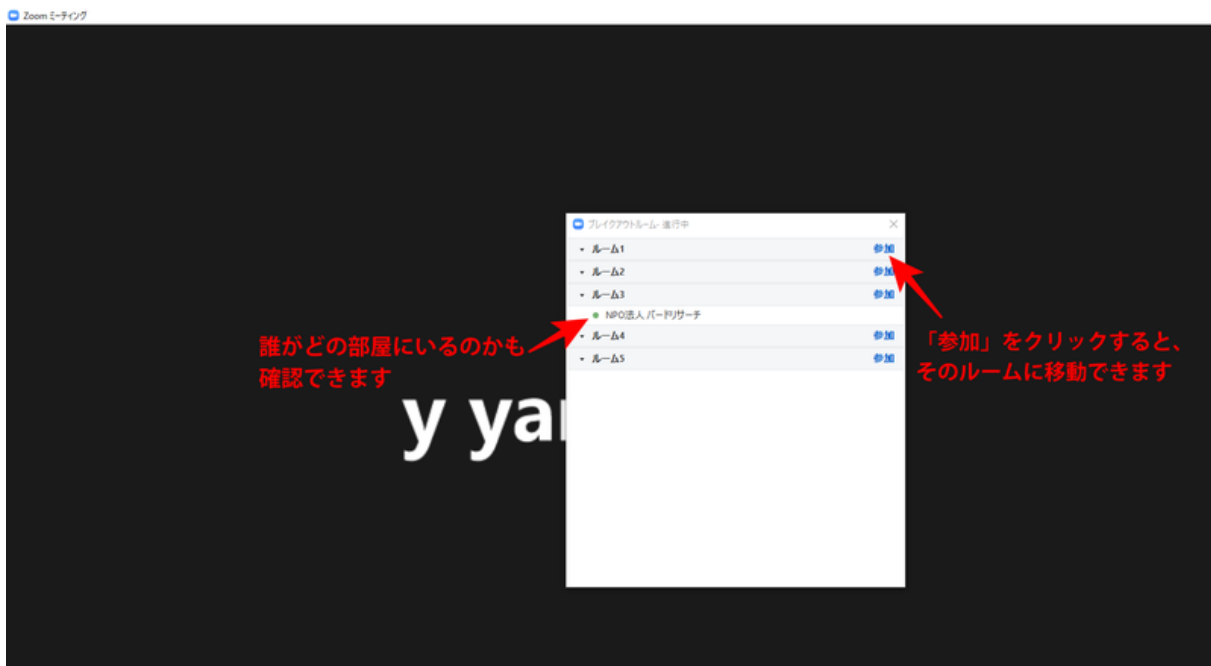
Zoom ブレイクアウトルームの利用方法

自由集会と懇親会では、複数のルームを Zoom 上に作ります（ブレイクアウトルームという Zoom の機能です）。Zoom の画面の下に「ブレイクアウトルーム」というアイコンがあるので、これをクリックしてください。設定されているルームのリストが表示されるので、好きなルームを選んで移動できます。

※正常にブレイクアウトルームを使用するためには、Zoom アプリのバージョンは 5.3.2 以上が必要です。



Zoom 画面にカーソルを移動させて、画面下メニューを表示させます。「ブレイクアウトルーム」をクリックします。



ポップアップウィンドが開くので、リストの中から好きなルームを選んで「参加」をクリックしてください。※上記の画面は Windows です。iPad などではメニューの表示方法が異なります。

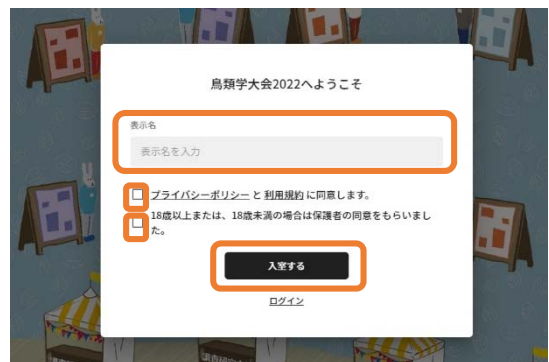
ポスター発表の見かた（入室について）

ポスター発表の質疑は、oVice という平面のバーチャル空間上で行います。oVice のアカウントを登録しなくても、表示名の入力だけで参加が可能です。空間内の移動や、ポスターの表示・非表示、会話の成立には、少しコツがあり、慣れが必要です。

1920×6400 ピクセルの縦長の Web スペースにポスター番号と発表者名が掲示され、アバターと呼ぶ自身のアイコンを近づけるとポスターが開きます。質疑はアバターを近づけて音声のみで行います。

推奨環境は PC となっていますが、スマートフォンでも利用可能です。PC の場合のウェブブラウザは Windows、Mac とも、**Chrome** の利用が推奨されていますが、**Edge** でも利用可能です。Mac については、**Safari** で利用可能です。

メール等でバードリサーチから通知された oVice 会場の URL リンクをクリックしてください。ウェブブラウザが起動し、右の画面が開きます。アカウントを取得（oVice の会員登録）は必要ありません。ご自身の「名前 所属」を簡潔に記入して、確認のチェックを入れて「**入室する**」ボタンをクリックしてください。



入室の際に**パスワード**が必要です。参加者には、メールでパスワードをお知らせします。

入室すると、画面上部のブラウザ側で、ポップアップが開きますので、マイクの使用を許可してください。カメラは基本使わないのでブロックしても構いません。

入室するとブラウザの画面内左上に入力した名前が入ったアイコンがあります。

これがあなたの位置を示している「アバター」と呼ばれるものです。

ポスター会場では、このアバターを移動させて、他の参加者と会話をしたり、ポスターを見たりします。アバターを移動させる方法は3通りあります。

- ・移動したい場所をダブルクリック
- ・自分のアバターをドラッグする
- ・PC キーボードの矢印キーを押す

画面の右側を表示するためには、ウィンド下部のスライダーをドラッグしてください。

画面の上下の移動には、マウスのローラーを転がしてください。

入室後の操作について詳しくはバードリサーチ作成の oVice 利用マニュアル

https://www.bird-research.jp/1_event/jbraoc2022/jbraoc_oViceManual.pdf

を参照してください。

ポスター発表会場の全体像

ポスター会場は、縦長に作られています。
ミニマップアイコンをクリックすると、
会場の全体像を見ることができます。
ミニマップ上でダブルクリックすると、
その場所に移動することもできます。



コアタイムはポスター番号奇数が 1/7、
偶数が 1/8 の午前中です。各発表者の
方は、自分のコアタイムの間はポスター
前で質問に応じてください。

エントランス

入室するとあなたの
アバターはこの位置に

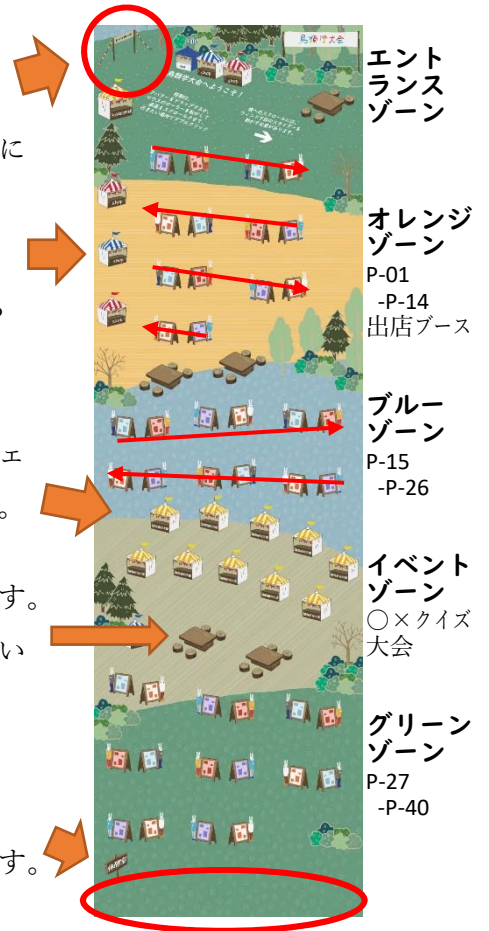
ポスターは左上から
ジグザグに P-01 から
並んでいます。

調査研究支援プロジェ
クトのコーナーです。

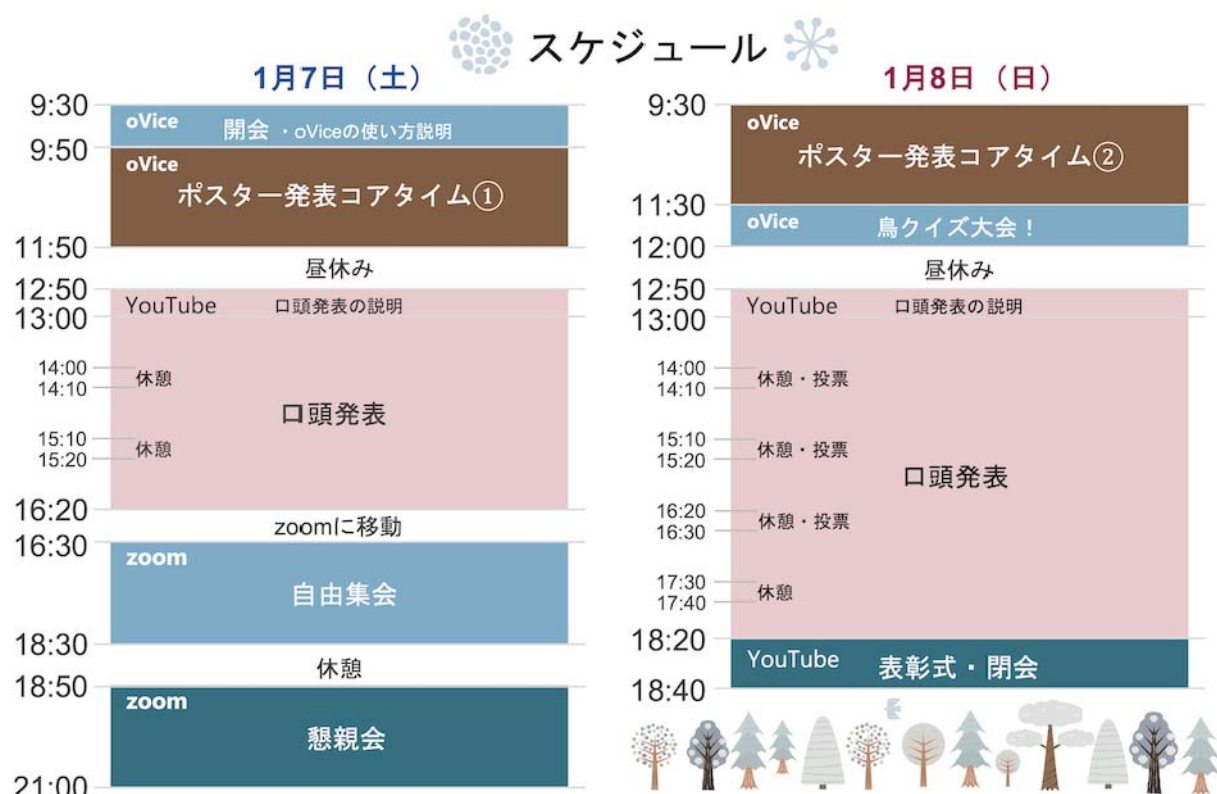
休憩用のテーブルです。
友人との談笑にお使い
ください。

休憩室コーナー

声が漏れない個室です。



4. スケジュール



5. プログラム・講演要旨

<口頭発表>

口頭発表 A-01 1月7日 13:00-13:20

フライトコールによるヤイロチョウの渡り調査～5年間の渡来時期の傾向～

○植松永至 1.2・小倉豪 1・溝口文男 1・中村豊 1・中原聡 1・岡部海都 1・楠木憲一 1・岩本忠義 1・平田智法 1・黒田治男 1・齊木孝 1・牛込祐司 1・松宮裕秋 1・佐野清貴 1.3・峯光一 1.4・鳥飼久裕 1.5・森下功啓 1.6・中原亨 1.7・山口典之 1.8・大槻恒介 1.8・井上拓海 1.8・上田浩一 1.9・貞光隆志 1.10・西剛 1.10・古田慎一 1.11・中村滝男 1.12・森茂晃 1.13・星野由美子 1.14・今森達也 1.15・増川勝二 1.15 (1 ヤイロチョウ渡り調査Pチーム・2 信州タカ渡り研・3 カンムリワシ R・4 南西環境研・5 奄美野鳥の会・6 熊本高専・7 北九州市博・8 長崎大院・水環・9 五島自然ネット・10 対馬野鳥の会・11 関門タカ渡り会・12 生態系トラスト協・13 ホシザキ G 財団・14 三瓶自然館・15 北陸鳥類研)

ヤイロチョウは、主に本州・四国・九州に少数が渡来する夏鳥である。演者らは2018～2022年にかけて本州中部以西、四国、九州、南西諸島等において移動中のヤイロチョウが夜間に発するフライトコールを録音し、渡り状況の調査を行ってきた。今回は主に5年間の渡来時期（初認日）について、現時点での解析結果を報告する。ヤイロチョウのフライトコールは4月下旬から確認され、5月中旬～下旬に確認地点数は多くなり、6月に入ると少なくなった。2022年は悪天候が関係してか、ほとんどの調査地で初認日が遅い傾向がみられた。

口頭発表 A-02 1月7日 13:20-13:40

九州南部における越冬ツバメの分布と餌場環境利用の評価

○天野孝保（長大・院・水環）

鳥類の長距離渡りは、非繁殖期において北半球の温暖な南方地域で過ごすことで生存に利益をもたらす。渡り経路や移動パターン、越冬地域、そもそも渡りをするかは、現在の様々な環境要因やこれまで経験した地史的背景などに影響をうけ多様化することがある。本研究では本来より北方で越冬している九州南部のツバメを対象とした。本種が非繁殖期に日本での越冬を可能にしている要因を解明するため生息場所と餌場環境を知ることが目的とした。九州南部において地域スケールの気候と流域スケールの土地利用の両面から越冬要因の理解を深めた。

口頭発表 A-03 1月7日 13:40-14:00

モテる雄は冬に頑張る！？ミソサザイの雄の非繁殖期のなわばりが繁殖成功に与える影響の解明

○惣田彩可（京都大・院・理）

ミソサザイは山地の溪流沿いで繁殖し、冬季には低地へ移動してくると一般的には考えられている。しかし、本研究の調査地である芦生研究林（京都府）では、冬季にも溪流沿いになわばりを維持し続ける個体が観察された。そこで、ミソサザイは一夫多妻制であることをふまえ、「冬季になわばりを維持していたミソサザイの雄は、繁殖期により多くの雌とつがいになる」という仮説を立てた。2022年度には8個体について越冬なわばりの調査を行った。今後、これらの個体の繁殖成績について調査し、仮説の検証を行う予定である。

口頭発表 A-04 1月7日 14:10-14:30

人里で暮らす大型鳥類の保全をコウノトリから考える ～巣立ちビナの行動圏と利用ハビタット～

○伊崎実那

近年事故が急増しているコウノトリは、特に巣立ち後1年以内の幼鳥の収容割合が高く、原因は人間活動に起因するものが44.5%を占める（松本2017）。対策にあたり、水田が主な生息場であるため農家との折り合いは重要で、根拠に基づく丁寧な保全エリアの設定と働きかけが必要である。そこで、市民と連携した幼鳥11羽の目視調査から行動圏（位置と面積）を解析したところ、巣を含み平均は56.20haであった。また、幼鳥は作付けのない水田ビオトープとその周辺を頻繁に利用した。さらに、行動圏内で実施した対策と成果も紹介し共生の課題を考察したい。

口頭発表 A-05 1月7日 14:30-14:50

オオバンモデル「ラモウちゃん」が解説するハス田の野鳥羅網事故の原因と対策

○内田理恵（バードリサーチ会員）

茨城県霞ケ浦周辺のハス田で多発している水鳥類の羅網事故。これまできちんと調査されてこなかった事故原因を、オオバンモデルの「ラモウちゃん」が体を張って解説。防鳥ネットの網目サイズや網目形状と被害鳥の体の大きさや体形との不整合を説明し、ハス田における野鳥のレンコン食害の抑止と生息野鳥の安全を両立させる防鳥ネットを提案します。

「バードリサーチ調査研究支援プロジェクト2019」支援研究の追加報告。

口頭発表 A-06 1月7日 14:50-15:10

2022年夏の増水がオオハクチョウに与えた影響

○嶋田哲郎（伊豆沼財団）

伊豆沼・内沼では、ハスとオオハクチョウ（以下、オオハク）は下記のように関係が深い。GPSロガーによる追跡では、オオハクは沼に依存し、ハス群落に分布した。泥中にあるレンコンは水深が深いと採食できないため、水位の低いときほどオオハクはハスを利用した。さらに、オオハクの採食圧によってハスが減少し、開放水面が拡大したことで溶存酸素が改善した。このハスが、2022年夏、300mmもの豪雨による水位上昇によって全滅した。ハスの消失がオオハクチョウに与えた影響について2021年と2022年の11月の個体数を用いて評価し、考察した。

口頭発表 A-07 1月7日 15:20-15:40

日本列島を利用するシギ・チドリ群集の主な生息地における球磨川河口の位置

○高野茂樹（八代野鳥愛好会）・守屋年史（バードリサーチ）

球磨川河口を利用するシギ・チドリ類の群集組成は、日本各地飛来地の群集組成との間に関連性があるかを明らかにするために、モニタリング 1000（2016～2020 年）の調査データを用い、MDS 法（多次元尺度構成法）で各飛来地の類似性を探った。低類似度区分（類似度 40～47）では、内海・内湾や外洋沿いなどによって区分される傾向があり、球磨川河口は内海・内湾性の飛来地と区分された。高類似度区分（類似度 55～65）では、球磨川河口は白川河口、宇佐海岸、加茂川河口や藤前干潟との類似が示された。発表では、類似度の結果についても考察する。

口頭発表 A-08 1月7日 15:40-16:00

茨城県稲敷市の甘田入干拓・西の洲干拓の草原性希少鳥類を調べる

○内田初江（日本野鳥の会茨城県）・北沢宗大（北海道大学）・福田篤徳（日本野鳥の会茨城県）

茨城県稲敷市甘田・西の洲地区は、霞ヶ浦からの浚渫の掘削土を入れ、農地を改良する基盤事業が行われてきた。人為攪乱を受けた環境は大部分が草原・湿地環境となり、草原性鳥類に適した環境になっている。しかし、近い将来農地に整備されて所有者に返還される予定であり、現在の環境は失われる見通しのため、鳥類の記録を残すこととした。2022 年（令和 4 年）繁殖期の定量・定性調査により、環境省や茨城県でレッドリストに選定された希少種について、他の重要湿地に匹敵するオオセッカ等の 7 種の生息とそれらの予測数を明らかにした。

口頭発表 A-09 1月7日 16:00-16:20

伊豆諸島における 1970 年以降の鳥類群集構造の変化への人為攪乱と外来種の影響

○飯島大智（千葉大・院・融合）・安藤温子（国立環境研究所）・井上遠（バードライフ・インターナショナル東京）・佐藤望（くりべえす）

生態系に対する人間活動の影響は海洋島で顕著であり、種の絶滅や劇的な群集構造の変化を引き起こしてきた。鳥類群集の変化については、化石や標本を用いて過去数千から数百年の規模で検証した研究が多い一方、過去数十年の群集構造の変化とその要因を評価した研究は見当たらない。本研究では、1970 年代と 2010 年代における伊豆諸島 10 島の鳥類群集の変化を解明し、その駆動要因を推定した。群集構造は島間で大きく異なり、群集構造の変化にも異なる特徴が見られた。その要因として開発、噴火、外来種による影響が示唆された。

口頭発表 B-01 1月8日 13:00-13:20

録音音源からの野鳥の自動識別

○森下功啓（熊本高専）・太田佳似（日本気象予報士会 関西支部）・植田睦之（バードリサーチ）

本発表は 2021 年度に報告した環境音からヤンバルクイナの鳴き声を自動識別する研究の続報である。より汎用的な鳴き声識別 AI を得るために、識別対象に野鳥 18 種、昆虫 12 種、カエル 5 種、ニホンジカ、人工音数種を追加した。音声はスペクトログラムの画像に変換し、それを VGG16 で転移学習した。学習後に学習に使用していない音源を用いて予測処理を行った結果、アカヒゲ、ヤンバルクイナ、リュウキュウコノハズク、アカショウビン、ウグイス、モズ、ホトトギス、コジュケイでほとんど誤識別しないことがわかった。

口頭発表 B-02 1月8日 13:20-13:40

南大東島に自然移入したウグイスの音声－XX 年後の調査をよろしく

○濱尾章二（国立科学博物館）

ウグイスのさえずりは本土よりも島で構造が単純なことがわかっている。ハワイでは人為的移入から約 80 年後の調査で単純になっていたことから、さえずりの単純化は比較的短期間で起こると考えられている。南大東島では本土から自然移入したウグイスが 2000 年頃から繁殖している。今回この島で移入約 20 年後のさえずりを分析したところ、本土のものより単純だとは言えず、南大東島に渡った少数の祖先が偶然持っていた特徴が残っている状態だと考えられた。他の島のようにさえずりが単純なものになって行くか、今後の調査に期待したい。

口頭発表 B-03 1月8日 13:40-14:00

外来種ガビチョウの個体数増加による在来鳥類への影響

○西川大生（早稲田大学人間科学部人間環境学科 野生動物生態学研究室）、風間健太郎（早稲田大学）

日本国内で外来鳥類ガビチョウの個体数が増加し分布が拡大しているが、分布拡大に影響する要因や個体数増加が在来鳥類に及ぼす影響については不明点が多い。本研究では全国鳥類繁殖分布調査のデータを用いて、ガビチョウの分布拡大に影響を及ぼした地理的要因とガビチョウの個体数増加が在来鳥類に及ぼした影響を検証した。ガビチョウは標高が低く、気温が低く、降雪量が少ない場所ほど分布を拡大させやすく、1990 年代から 2010 年代にかけてガビチョウの存否や個体数にかかわらず、多くの地点でウグイスとヒヨドリの個体数は増加していた。

口頭発表 B-04 1月8日 14:10-14:30

繁殖期のカラス類との付き合い方を考える

○中村眞樹子 (NPO 法人札幌カラス研究会)

4月から7月は繁殖期のカラス類が巣やヒナを守ろうとして人を襲ってしてしまう。しかし事前にいくつかのシグナルを出していて、それを把握していれば、攻撃を避けることがある程度可能である。カラスの巣立ちヒナは平行には飛べるが、飛び上がることが困難である。札幌市の場合、公園や街路樹の地面から約2メートルの枝は取り払われている。枝があれば飛び上がれなくても、枝伝いに樹上への移動が可能になる。今回はカラスのヒナが巣立ち後に地面に下りてしまい、親が興奮して見境なく人を攻撃してしまった際の対応について報告をする。

口頭発表 B-05 1月8日 14:30-14:50

最南限繁殖地におけるニホンライチョウなわばり雄の季節移動

○朝倉俊治¹・堀田昌伸²・近藤多美子¹ (1:静岡ライチョウ研究会、2:長野県環境保全研究所)

筆者らは、1997年よりニホンライチョウ *Lagopus muta japonica* の世界南限地である南アルプス南部で無雪期におよそ月1回の生息状況調査をしている。2007年からは、なわばりの所有者やつがい関係を調べるため標識調査による個体識別を行っている。その中で、2017年と2018年の繁殖期に最南限のイザルガ岳になわばりを所有したある雄は、2016年と2019年の非繁殖期(秋群れ期)により北の上河内岳、2017年の非繁殖期も北の茶臼岳で確認された。世界南限地では、例数は少ないものの、繁殖期のなわばり場所から非繁殖期の生活場所へ北に向かって季節移動する個体がいることが確認された。

口頭発表 B-06 1月8日 14:50-15:10

スズメによるコシアカツバメの巣の乗っ取りとコシアカツバメの抵抗

○福井亘 (栃木・黒磯高校)

栃木県大田原市で2018-2022年にコシアカツバメの繁殖調査をした。巣作りを開始したペアの約3分の2は、途中で繁殖を放棄した。放棄の主な原因は、造巣期や産卵期に、スズメに巣を乗っ取られることだった。スズメに巣を乗っ取られることにより、コシアカツバメの繁殖スケジュールに遅延が生じ、繁殖成績に影響を与えていると考えられた。

口頭発表 B-07 1月8日 15:20-15:40

マガモが樹洞に営巣した事例

○新田啓子（日本オシドリの会）・中村眞樹子（NPO 法人札幌カラス研究会）

マガモ *Anas platyrhynchos* は、札幌で 1980 年代から繁殖している（足立 1993）が、2021 年 5 月上旬、札幌市中央区にある中島公園において、前年のオシドリの営巣木からマガモが出巣して、樹洞に営巣していることがわかった。それ以前も、樹上に止まっていたり、樹洞探しをしたりという姿を何度か目撃したことがある。日本では一般にマガモの営巣場所は地上が多いが、樹上にいた記録や樹洞に営巣した事例を紹介する。

口頭発表 B-08 1月8日 15:40-16:00

秋に急増するホシハジロと増減が比較的少ないキンクロハジロ-琵琶湖南湖におけるハジロ属の個体数変化

○倉沢康大

琵琶湖南湖での日頃の観察から、ホシハジロとキンクロハジロの個体数が季節的に大きく増減する事に気付いた。そこで、その実態を把握するために 2 種を対象としたカウントを行った。調査は 2021 年 10 月 17 日から 2022 年 4 月 17 日の毎週、琵琶湖大橋から近江大橋の区間に 14 地点を設定し、識別可能な範囲にいる 2 種をカウントした。結果、ホシハジロは 10 月下旬から 11 月上旬に急増する事、その後急減し、3 月上旬にやや増加する事がわかった。一方、キンクロハジロも似た傾向を示したが、増減は比較的少なかった。

口頭発表 B-09 1月8日 16:00-16:20

トモエガモは越冬地を移動したのか？～2022 年冬期の観察記録より～

○星野由美子（三瓶自然館）・森茂晃（ホシザキグリーン財団）・安食一步（島根大学）

宍道湖では、2021 年 11 月から 2022 年 2 月の間に最大でおよそ 30,000 羽のトモエガモの飛来が観察されました。

宍道湖では数万羽の飛来が 2 シーズン前から続いており、その間には最長で約 20km を移動している様子が観察されていました（森・星野(2021)；日本鳥学会オンライン大会発表）。しかし、2022 年 1 月から 2 月には、さらに長距離を移動し、滞在する水系を変えている可能性が考えられるトモエガモの飛行を観察したので報告します。

口頭発表 B-10 1月8日 16:30-16:50

十勝地方におけるハクガンの観察報告 ～翼の模様の変異に注目して～

○遠藤碧子(帯広畜産大学)・及川樹也(帯広畜産大学)

ハクガンは通常、初列風切羽は全て黒く、次列風切羽は全て白い。しかし、野外でハクガンを観察している際、次列風切羽の一部黒い個体を発見した。Reeber(2015)によると、北米では、初列風切羽の黒が7枚や8枚の個体が観察されている。一方、日本では、風切の色に注目した調査・研究はなされていないと考え、2022年10月に十勝地域で観察を行った。その結果から明らかになった、翼の模様の変異や、その割合について紹介する。

口頭発表 B-11 1月8日 16:50-17:10

アメリカヒドリとヒドリガモの尾羽の枚数の傾向

○及川樹也(帯広畜産大学)

初列風切羽や次列風切羽の枚数は、分類群によって固定されているが、ジシギ類に代表されるように、尾羽の枚数には種や個体による変異が見られる。しかし、それぞれの種の尾羽の枚数は意外なほど調べられていないのが実情である。そこで本研究では、ヒドリガモとアメリカヒドリを対象に、野外観察と ebird での画像検索を用いて尾羽の枚数を記録した。その結果、両種ともに尾羽の枚数に変異が存在することが分かった。本研究が、より多くの種の尾羽の変異について注目されるきっかけとなれば幸いだ。

口頭発表 B-12 1月8日 17:10-17:30

亜種リュウキュウオオコノハズクの基礎生態

○江指万里(北大・理院)・熊谷隼(北大・理院)・宮城国太郎(沖縄野鳥の会)・外山雅大(根室市歴史と自然の博物館)・高木昌興(北大・理院)

沖縄県に生息する亜種リュウキュウオオコノハズクはその分布や生態がほとんど知られていない。そこで本研究では、沖縄島にて分布調査・捕獲標識調査・繁殖モニタリング調査を行い、知られざる本亜種の生態を詳細に調べた。その結果、森林だけでなく都市に近い場所にも分布していることや、幅広い餌資源を利用していることなどが分かった。

2021年度のバードリサーチ調査支援プロジェクトでご支援いただいた「リュウキュウオオコノハズクは都市で生きられるかー適切な保全に向けた基礎生態の解明ー」の内容と併せて報告する。

口頭発表 B-13 1月8日 17:40-18:00

ヤマシギとアマミヤマシギを夜行性と言ってはいけない

○小高信彦（森林総研九州）・鳥飼久裕（奄美野鳥の会）・久高将和・久高将洋（Yambaru Blue）・髙原健二（沖縄野鳥研究会）・水田拓（山階鳥研）

私たちが野外でヤマシギやアマミヤマシギと出会うのは、林道や畑地などの開けた環境で、その時間帯のほとんどは夜間である。このため、これまで私たちはヤマシギ類を夜行性と考えてきた。しかし、森林内に自動撮影カメラを設置すると、ヤマシギ類は主に日中活動していることが明らかとなってきた。本発表では、森林内に設置した自動撮影カメラによるヤマシギ類のデータを紹介するとともに、発信機等を使用したヤマシギ類の研究成果のレビューを行い、なぜヤマシギ類が夜行性と誤解されてきたのか、その日周活動性について議論したい。

口頭発表 B-14 1月8日 18:00-18:20

孤独なジシギが群れるとき アオシギの夜の生態に迫る

○松宮裕秋

アオシギは冬鳥として渡来するシギの一種であるが、生態、分布、渡りなどのほとんどのことについて研究が進んでいない謎に満ちた鳥である。日本ではこれまで、アマチュアのバードウォッチャーによって、越冬生態や生息環境に関する知見が蓄積されてきた。しかしながら、夜間の行動については知られていなかった。発表者は、2017年から夜間に活動する本種の観察を続けている。その結果、従来知られていた日中の姿とは異なる生態が分かってきた。知られざるアオシギの夜の行動について報告する。

＜ポスター発表＞

コアタイム：発表番号奇数 1/7(土) 9:50-11:50 偶数 1/8(日) 9:30-11:30

ポスター発表 P-01*

ムクドリの新繁殖期のねぐらとしての巣箱使用

○越川重治

樹洞性繁殖鳥類が新繁殖期にねぐらとしての巣箱を使用する報告は、シジュウカラ、アカゲラ、ヤマゲラなどで知られている。しかし、ムクドリでは、これまで新繁殖期にねぐらとしての巣箱の使用は知られていなかった。ムクドリが千葉県船橋市で 2020 年 12 月から 2021 年 1 月までの厳冬期に巣箱で 29 日間ねぐらをとった。巣箱でねぐらをとった理由は巣場所競争のためである可能性が高いことを報告したい。

ポスター発表 P-02*

「落とし物」から推測するハヤブサの食性

○加藤ゆき（神奈川県立生命の星・地球博物館）

発表者は地面に落ちている羽やペリット（落とし物）に着目し、それらを手掛かりに地域にどのような鳥類が生息しているのかを調べています。その場にいないとできない「観察」とは違い、「落とし物」はいつでも拾うことができ特別な機材が必要ないこと、整理も簡単なことから気軽にできる調査手法の一つだといえます。今回の発表では、ハヤブサの食事場所の下で拾った「落とし物」から本種の食性を推測します。

ポスター発表 P-03*

サーマルイメージングカメラを用いた小鳥類の営巣基質の表面温度測定： 見えてきた課題と可能性

○三上かつら（バードリサーチ）・森本元（山階鳥研）・上野裕介（石川県立大）・三上修（北海道教育大）

“サーマルイメージングカメラ”は、温度を画像化することができるカメラである。近年、これを用いて夜間の鳥の検出や、鳥の代謝の計測、林内にいる猛禽類の位置検出などに応用されている。本研究では、サーマルイメージングカメラを用いて、人工環境で直接観察することが困難な場所にある小鳥類の営巣場所検出を試みた。固定式視線誘導柱の内部にある巣の位置について、現時点では検出が難しいということがわかった。一方で、このカメラを利用できそうな状況や必要な設定に関し、いくつかの知見が得られたのでここに報告する。

ポスター発表 P-04

鳥と人の関わり：1万2千年の西洋史

○黒沢令子（バードリサーチ）

人は有史以前から鳥と関わりを持ってきた。西洋史を通じてその関係を総括した“Birds and Us” (2022)が出版されたので、主な内容を紹介したい。鳥は早くも新石器時代の岩絵に登場し、絵文書等を含めて長く記録に残されてきた。人にとって鳥は食料や衣服などへの直接利用の対象から始まり、やがて鷹狩のようにその力を借りたり、科学の発展と共に、鳥の生き様を観察して科学技術や知的活動のインスピレーションの対象にもなる。保護活動や野外研究が盛んになった背景は、乱獲で鳥が減少したことへの気づきだった。

ポスター発表 P-05

街角で見かけるドバトの趾（あしゆび）切断

○西田澄子（東京都市大・院）・海瀬慧（東京都市大・環境）・北村亘（東京都市大・環境）

街中のドバトを観察していると、趾（あしゆび）を失ったドバトを見かけることがあります。私たちは、ドバトが趾を切断してしまう現象に関与する要因を探求すべく、まず趾欠損のあるドバトや他の鳥がどのくらい見られるか、調査をはじめました。その結果、多くの趾欠損個体が身近で見られることが分かりました。今後、さらに観察を続けて、将来的には趾欠損の発生率と周辺環境を比較していく予定です。

ポスター発表 P-06*

瀬戸内海中部におけるカモメ類の季節変化（予報）

○多田英行（日本野鳥の会・岡山）

瀬戸内海中部のカモメ類の個体数の季節変化を調べるため、2020-2022年の越冬期（9-3月）の岡山県内のカモメ類の個体数をカウントした。その結果、ウミネコは越冬期前期に個体数が最大（800-1200羽）となり、カモメは越冬期後期に最大（60-170羽）となった。それ以外のカモメ類は越冬期中期から後期にかけて最大となった（セグロカモメ：240-260羽、オオセグロカモメ：1-6羽、ユリカモメ：790-1150羽、ズグロカモメ：16-17羽）。2022年の越冬期中期の第1回冬羽個体の割合は、ズグロカモメでは約18%、それ以外のカモメ類では約1%だった。

ポスター発表 P-07*

観察からわかった仙台の鳥の 20 年

○宮本竜也（東北大学理学部）

杜の都と呼ばれる仙台は緑と都市が近接して発達した街で、自然林と都市に挟まれた公園では 20 年以上にわたり鳥の観察会が行われてきた。この間に住宅地の立ち退きと公園整備が近隣で進み、鳥の住む環境は変遷してきた。公園整備に伴う長期的な鳥の変化として、冬に見られる種数は森林性の鳥を中心に増えていた。今回は増減のあった種の具体例を紹介する。一方で春の渡りは気候変化を受けて早まっていると言われており、広域の気候の指標と関係していた。加えて越冬する地域を考慮すると渡りの時期をよく説明しうるとわかった。

ポスター発表 P-08

奥秩父突出峠の森林環境と鳥類群集（1989 年～の変化）

○石田健（自由科学者）

埼玉県秩父山地の標高 1650m 付近の針広混交林で、1989 年から森林景観と鳥類群集を観測した。丈約 2m の密集したスズタケが登山道両側の林床を覆っていたが、現在 2022 年はシカの被食によりスズタケの姿が消えた。シカ剥皮によるウラジロモミと老衰によるウダイカンバ等の枯死、倒木によってギャップの多い植生に変化した。ウグイス、コルリ、クロジ等がいなくなり、林冠を利用する種の生息密度も低下した。気温上昇にともない、エゾハルゼミが鳴きだし、アカハラやキビタキが生息するようになった。写真と録音で紹介する。

ポスター発表 P-09*

籠川でのイソヒヨドリの出現傾向

○渥美美保

籠川沿いの 365 日の野鳥観察は 3 年目の終盤に入りました。年に数回しか遭遇しない種も含めた 89 種の出現傾向が見える化した記録の中で、イソヒヨドリが特徴的で興味を持ちました。繁殖期にオスのさえずりが聞かれた 1 年目、オスが出現しなかった 2 年目、3 年目とも、8 月中旬から 10 月にかけて、メス 1 羽がさえずったり虫を捕食したりして滞在しているようです。秋だけの顕著な出現は、内陸に進出中のイソヒヨドリに共通する傾向なのでしょうか。

ポスター発表 P-10

宍道湖におけるトモエガモの個体数について

○森茂晃（ホシザキグリーン財団）・星野由美子（三瓶自然館）・安食一步（島根大学）・豊田暁

宍道湖では 2019-20 年の越冬シーズンに 2 万羽を超えるトモエガモが確認された。2019 年までは既存文献等に宍道湖で 2 万羽以上の記録は見当たらず、千羽以上の記録でも不連続に 4 シーズンしか見当たらなかった。しかし、2019-20 年以降は 3 シーズン連続して数万羽が飛来している。この 3 シーズンは、群れを確認した後はほぼ見つからなくなるまで調査し、期間中の 9 割以上の日数からなる個体数の記録を得た。また、2021-22 年シーズンは江の川の個体数も記録した。本発表ではそれらを比較しながら紹介する。

ポスター発表 P-11*

小河川における育雛前中後の成鳥カルガモの行動と生態

○長久保定雄（バードリサーチ）

2022 年、埼玉県朝霞市を流れる黒目川において撮影した約 7000 枚のカルガモ写真を解析し、可能な限り個体識別・雌雄判別して 11 組のペアを抽出し、5 組が育雛に至り、抱卵の形跡はあるものの 6 組が育雛まで至らなかったことを確認した。また、育雛が認められたペアと、認められなかったペアの、定住性およびペア継続性の違いについて多くの情報を得ることができた。加えて、繁殖期を通して多くのカルガモの嘴の模様が大きく変化することが観察されたとともに、雌の嘴に婚姻色のようなものが現れることが示唆された。

ポスター発表 P-12*

ジョウビタキとシジュウカラの営巣競争：巣からの視界が鍵

○山路公紀・石井華香

冬鳥であるジョウビタキが日本で繁殖域を拡大している。ジョウビタキとシジュウカラが営巣した換気扇フード、郵便受けおよび巣箱を、両種の利用状況に応じて 4 グループに分けて比較・分析した。ジョウビタキはシジュウカラに比較して、巣から外をみる視界が広い構造物を利用して、この視界が狭くなるにつれてシジュウカラも利用するため、営巣場所をめぐる競争がおきていた。さらに視界が狭い構造物をシジュウカラのみが利用していた。穴径も重要な要素であるが、広い範囲において、巣からの視界の広さが重要な要素となっていた。

ポスター発表 P-13

小笠原諸島～伊豆諸島ツバメの渡り調査 2022 大島・新島・式根島・三宅島のツバメの巣の数

○重原美智子

私は小笠原諸島や伊豆諸島の島々を経由して飛来するツバメ (*Hirundo rustica*) の生態を島民の方達と協力して調べています。これまでの調査で、現在の伊豆諸島では主に三宅島以北の島で繁殖をしていることがわかっています。2022 年の繁殖期に、地元の協力者とともに可能な限り街の中で巣を探し、聞き取り調査をおこない、大島、新島、式根島、三宅島の 4 島のツバメの巣の数や、繁殖状況を調べました。ツバメの生態を明らかにするための基礎となる調査を目指しました。それぞれの島で観察されたツバメの巣の数や、繁殖の状況などを報告します。

ポスター発表 P-14*

大阪府北東部におけるコシアカツバメの秋の集中・集合

○中津弘

コシアカツバメの秋の集合は散発的に報告されるが、認知度が低く、情報も乏しい。そこで、本種の集合が観察される大阪府交野市とその近辺で 2022 年に予備的な観察を行った。同市内の本種が秋に集合する地区で 4-10 月に行ったラインセンサスでは出現は 9 月に最多となり、同市近辺で 9-10 月に行ったポイントカウントでは、出現は集合地区で最も多く、同地区から遠ざかるにつれて減少した。同地区での早朝観察では、9 月に 25-149 羽の集合止まりを確認したが（日中の止まり数は最大 230 羽）、10 月には集合止まりは認められなかった。

ポスター発表 P-15

都市一農村間の環境勾配におけるツバメの営巣地選択と最適環境の評価

○天野孝保（長大・院・水環）・山口典之（長大・院・水環）

都市と農村は人的活動により形成された二次的環境である。鳥類のいくつかは典型的な都市と農村、それを繋ぐ連続的に変化する環境勾配を広く利用する。本研究では、都市から農村にかけての環境を広く利用するツバメを対象とした。本種の繁殖において、都市や農村よりむしろ両者の中間に良好な環境が存在するのを知ることが目的とした。都市から農村にかけての環境勾配を指数化するための「都市度」を算出し、それと営巣数の関係を解析したところ、中間的環境が営巣地として多く利用される可能性が示唆された。

ヤマガラ・クラッチサイズ・リビジテッド

○関伸一（森林総研・関西）

鳥類の生活史研究における古典的な指標の一つがクラッチサイズ（一腹卵数）。「卵は何個かな？」パッと見てわかる、抱卵期間中に1回確認できれば記録になる、捕食に影響されにくく意外と記録数が稼げる、というわけで、巣箱への予定外の入居者のクラッチサイズは巣箱研究者のサブテーマにもってこいです。今回は沖縄島でホントウアカヒゲ用巣箱を占領してしまう困ったヤマガラの記録をもとに、最先端のテーマではないかもしれませんが、最南端のヤマガラの小さいクラッチサイズを報告。日本列島周辺での地域変異もレビューします。

溶岩草原で繁殖するヨタカ！富士山麓での営巣環境となわばり分布

○水村春香（東大・院）・渡邊通人（富士山生物多様性研）・久保田耕平（東大・院）・樋口広芳（慶應大）

「よだかは、じつにみにくい鳥です。」宮沢賢治の『よだかの星』の一節で知られるヨタカ。夜に活動し、巣はつくらず地面に直に卵を産むという独特の生態…。かれらは主に開けた森で繁殖しますが、富士山麓では草原でも恒常的に繁殖することを私たちは見つけました。そこで、どれくらいの密度で繁殖し、どんな環境に巣はあるのか、ということ調べました。すると、広大な草原の中でなわばり分布は意外にも偏っていること、営巣場所にも特徴があることが見えてきました。鍵となるのは、富士山の「溶岩流」！？

ケリの季節移動と行動圏の解明

○小丸奏（岐阜大学大学院自然科学技術研究科）

昨年度バードリサーチ支援研究プロジェクトにてご支援を頂いたため、研究途中ではありますが、経過を報告させていただきます。

ケリは先行研究の結果から、季節移動を行っている可能性がありましたが、そのルートや行動圏はわかっていません。そこで、繁殖地でケリにGPSを装着し、年間を通しての移動ルートや行動圏の解明を試みました。現在、調査地内の多くの個体は確認できなくなりましたがGPSを装着した個体は繁殖地にとどまっており、大きな移動はしていない状況です。

クロサギの羽色と採餌行動及び利用環境の比較

○植村慎吾（バードリサーチ）

クロサギには黒色型と白色型の二型があり、低緯度地域ほど白色型の割合が高い傾向がある。採餌の方法が羽色によって異なるという少数の先行研究があるが、先行研究間で一貫した傾向はない。本研究では、採餌行動を5分間記録し、羽色との関係を調べた。歩数、捕食の試行回数、ジャンプ回数などの捕食行動に羽色による有意な違いは見られなかった。白色型の個体の方が多様な環境で採餌をしている可能性があった。また、Web上の写真検索で採餌中の写真を集め、捕食した魚の大きさを比較したが、羽色による違いはみられなかった。

津軽海峡周辺で繁殖するウトウの採餌場所選択と繁殖アウトプット

○小澤光莉（東洋大院）・東條菜々花（東洋大院）・島袋羽衣（明治大）・平田和彦（千葉県立中央博物館）・伊藤元裕（東洋大）

変動性の高い海域は魚類の量や分布が変化しやすい。複数の海流により変動性が高い津軽海峡（松前小島、鯛島、弁天島）で繁殖するウトウの採餌域、餌、雛の成長を調査した。松前小島と鯛島では繁殖地周辺、弁天島では噴火湾湾口から恵山周辺の太平洋を高頻度利用した。2019年弁天島ではマイワシの利用が推定されたが、2021、2022年では全島でカタクチイワシが利用され、雛の成長が高まった。本海域では、島毎にウトウの選好海域はあるが、カタクチイワシの選好性が高く、その利用可能性に応じた繁殖成績の変化が示唆された。

オオハクチョウ (*Cygnus cygnus*) において認められた嘴のパターンのバリエーション

○岡田東彦（酪農学園大学 獣医学群 獣医学類）

国内には主にオオハクチョウ (*Cygnus cygnus*) およびコハクチョウ (*Cygnus columbianus*) 計2種類のハクチョウ類が越冬のため、飛来する。上嘴基部における黄色部の形状が両種を識別する際の特徴の1つに挙げられるが、その形状には個体差が認められるとされ、嘴のパターンは3ないしは4つの型に分類されるとの報告が知られる。発表者はオオハクチョウに着目し、2022年10月から12月にかけて、嘴のパターンの観察・撮影を試みた。本発表では、本種の嘴のパターンの個体差について報告する。

ポスター発表 P-22*

電柱や電線に止まる猛禽類と周辺環境

○天野孝保（長大・院・水環）

電柱や電線は、都市部や農村部、沿岸部や内陸部など環境要素に関係なく全国各地に存在する人工物である。鳥類のいくつかは、繁殖期や渡り時期、非繁殖期など生活史において休息や採餌の際にこれらの人工物を利用することがある。本研究は、長崎県五島列島福江島において研究活動の空き時間に補助的に行ったもので島内を周回し、越冬期に電線を利用する猛禽類を対象として、その周辺の環境の理解を深めた。本研究は環境や車の有無、時間帯、季節などを限定することなく実施できるためちょっとしたチャレンジ精神で挑戦できるであろう。

ポスター発表 P-23

鳥類におけるハビタットとしての農業用水路の利用－水路形態と水稻栽培時期が鳥類の利用に及ぼす影響－

○鈴木涼太

農業用水路は水田とは異なる水辺環境として多様な生物のハビタットとなっているが、鳥類のハビタットとして評価した研究は少ない。平地水田地帯の水辺環境は、水稻の管理により時期的に大きく変化するため、鳥類の生息に与える影響は大きい。その中でも水路は非栽培期においてハビタットとして機能する可能性がある。本研究では水路の形態をコンクリートと素掘りに分類し、栽培期と非栽培期で鳥類の利用を調べた。その結果、非栽培期においてコンクリート水路が鳥類ハビタットとして利用性が高いことが示唆された。

ポスター発表 P-24

埼玉県小川町のメガソーラー計画地におけるミゾゴイの生息状況

○小林みどり 1・鈴木邦彦 2・鈴木治美 3・高瀬仁志 2・小林洋一 1・斉藤裕也 4・小山正人 5・小山和美 5・内田博 6（1 みぬまサウルス企画事務所・2 比企の太陽光発電を考える会・3 小川町里山クラブ・4 比企・奥武蔵陸水生物調査会・5 野生動物救護獣医師協会・6 比企野生生物研究所）

埼玉県小川町の官ノ倉山東部は、約 30 年前にゴルフ場開発が頓挫、工事半ばで放置された結果、現在では、自然が回復しつつある。最近、ここにメガソーラー建設計画が持ち上がり、物議を醸している。2020 年春からの現地調査により、サシバの 2 シーズン連続での繁殖を確認した他、希少なミゾゴイやホトケドジョウの生息を確認した（バードリサーチ鳥類学大会 2021 他）。今回はミゾゴイに関する詳細について報告する。2021 年春、地域内の沢を探索し、古巣 4 巣を発見。古巣付近の 3 か所に設置した録音機で音声を記録、解析し、3 か所全てで本種特有の鳴き声を確認した。1 か所では営巣中のミゾゴイの撮影に成功した。

ポスター発表 P-25*

秋田県におけるイヌワシの生息実態調査

○足利直哉

秋田県では全県的にイヌワシの生息状況が不明な地域が多く、継続した生息状況の調査が必要である。当グループは2019年から奥羽山脈を主として調査を継続し、3ペアの生息を確認した。その他県内各地における合同調査でもイヌワシの生息を確認したほか、学生等新規調査員の育成・発掘にも取り組んでいる。会員には県外在住者もあり、調査に係る交通費等を自腹で賄っている。前述の現状を踏まえ本プロジェクトの活用により、調査参加者及び調査頻度を確保することで、調査不足地域におけるイヌワシの生息状況の把握を目指す。

ポスター発表 P-26*

沖縄県宮古島におけるインドハッカの初繁殖記録

○浜地歩 1,2・植村慎吾 1,3・能重光希 1・平良航大 1・仲地邦博 1 (1 宮古野鳥の会・2 プレック研究所・3 バードリサーチ)

インドハッカはインド、タイ、マレーシアなどで自然分布が確認されているムクドリ科鳥類である。日本国内では沖縄県石垣島、与那国島等で繁殖が確認されており、外来分布とされている。IUCN でも世界の侵略的外来種ワースト 100 に指定されている。今回、2022 年に宮古島で本種の繁殖を初確認し、成鳥 1 羽と雛 3 羽に環境省リングを標識した。今後、さらに南西諸島で分布拡大を行う可能性があり、注意を要する。また、個体の由来を明確にするための遺伝解析等の研究が望まれる。

ポスター発表 P-27

鋼製橋桁の内部に見つかったアマツバメのコロニー

○久野公啓 (信州ワシタカ類渡り調査研究グループ)・佐伯元子 (信州ワシタカ類渡り調査研究グループ)・堀田昌伸 (長野県環境保全研究所)

アマツバメの営巣場所は、日本国内では海岸の岩場や山岳地帯の岩壁とされるが、海外では、建物の軒下やイワツバメ類の巣を利用した例が知られている。2022 年の夏、長野県内の山間部で、橋を利用したアマツバメのコロニーを発見した。この橋は鋼製箱型の橋桁を用いているが、その内部に複数のアマツバメの巣が確認されたのだ。また、繁殖期の後には、多数のアマツバメがこの橋桁内部を夜間のねぐらとして利用していることもわかってきた。

ポスター発表 P-28

森林性鳥類の繁殖期における蠕虫感染率の生態的要因の比較

○石倉日菜子（東海大学院生物学研究科生物学専攻）・川路則友（森林総研フェロー）・松井晋（東海大学生物学部生物学科講師）

鳥類に感染する蠕虫（ゼンチュウ）類は主に節足動物などを中間宿主とする。同じ森林生態系においても採餌する場所や食性（果実食・昆虫食）によっても感染率が異なることが予想される。本研究では、2年にわたり北海道で繁殖期に捕獲した森林性鳥類から糞を採取して蠕虫感染の有無を調べた。成鳥（16種 102個体）のうち12個体（12%）、幼鳥（15種 67個体）のうち2個体（3%）から蠕虫卵が検出された。

ポスター発表 P-29*

鳥類の卵殻表面の覆う脂質の由来

○佐川南美（東海大学大学院生物学研究科）・佐藤敦（東海大学生物学部生物学科）・松井晋（東海大学生物学部生物学科）

鳥類の卵表面は細菌感染を防ぐために、物理的・化学的な生体防御機構を備えている。本研究では化学的防御に着目し、スズメとシジュウカラにおいて、尾脂腺オイルの産卵後の卵表面への移行の有無、卵表面脂質中の尾脂腺オイルの比率を実験的に明らかにすることを目的とした。両種の産卵期・抱卵期の卵、親の尾脂腺オイル・抱卵斑脂質を採取し脂質量算出と成分分析を行った。その結果シジュウカラでは抱卵期の卵表面脂質量が産卵期よりも有意に高く、尾脂腺オイルの移行が示唆された。スズメでは卵表面脂質量や成分に有意な差はなかった。

ポスター発表 P-30

獣医大における傷病野生鳥類救護活動と鳥類医学・医療一拠点施設閉鎖となり考えた

○浅川満彦

現在、全国獣医大の中で、野生動物の救護を専用の施設で行っていたのは酪農学園大学だけであったが、野生動物医学センター閉鎖に伴い、この活動は2022年5月に終了した。1988年12月からであったので、約34年間の営みであった。獣医学教育全般、鳥類医学・医療の教育機会は少なく、この活動はそのような面でも期待されていたが、獣医学教育の質の保証と国際化に取り組んでいる過程で、バイオセキュリティの面からの判断であった。今回の発表では演者らの拠点施設の活動概要を回顧しつつ日本の獣医学教育についての鳥類医学・医療の今後について論考したい。

ポスター発表 P-31

糞および胃内容物によるヒクイナの食性解析

○大槻恒介（長崎大・院・水環）

ヒクイナは湿生植物が繁茂する植生内を潜行し活動するため、採食の様子を目視で直接観察するのは困難である。そのため本種の食性はよく分かっていない。そこで、ロードキルで死亡した個体の筋胃（ $n=1$ ）と捕獲調査中に得られた糞（ $n=9$ ）の内容物を実態顕微鏡で観察した。その結果、胃内容物には植物の種子と大量の甲虫の外骨格片が含まれていた。糞からは胃内容物でも確認した甲虫の外骨格片がわずかに含まれていた。このことからヒクイナが雑食性であることが確かめられた。

ポスター発表 P-32

2050 年，2100 年のウグイスの初鳴きは？

○植田睦之（バードリサーチ）・太田佳似（日本気象予報士会 関西支部）

太田・植田（2020）はバードリサーチの生物季節調査「季節前線ウォッチ」のウグイスの初鳴きデータを用いて、初鳴き日を予測するモデルを作成した。今回、このモデルに「農研機構メッシュ農業気象データシステム」の将来の気温予測値を代入して、ウグイスの初鳴きの「未来予想図」を作成した。その結果、IPCC の低位安定化シナリオ（ 2°C 上昇シナリオ）でも、2050 年には今よりも初鳴きが 12 日程度早くなり、最大排出量に相当するシナリオ（ 4°C 上昇シナリオ）では、2050 年には 18 日、2100 年には 27 日も早くなることが予測された。

ポスター発表 P-33

メジロは何をしゃべっているのか？ーメジロの音声言語と混群構成種との関係ー

○近藤雅也

近年、動物の音声言語に関する研究が世界中で注目され、より多くの種類の音声研究が求められている。今回の研究で扱うメジロ（*Zosterops japonicus*）は、「チー」という声(以下チー音)と「キュルキュル」という連続した声(以下連続音)を主に発する。本研究ではこの 2 つの声の使い分けとその機能について検討する。また、メジロの異種の警戒声認識についても調べた。結果、メジロのチー音は互いの位置情報を共有する機能があり、連続音は集合を促す声であることがわかった。また、メジロは異種の警戒声を認識していることがわかった。

ポスター発表 P-34

研究支援のお願いー森の時空間的变化に対する鳥の反応ー

○柴山潤太（名古屋大学農学部）

私は小学生のころから趣味でバードウォッチングを続けてきた。現在、大学の卒論では、針葉樹人工林と針広混交林を対象に、森林の長期的な変化に伴う鳥相の違いと、鳥類の全般あるいは各種の森林環境選好性を研究している。調査地は愛知県北東部で、ラインセンサスと録音音声の解析を行っている。時間的変化を評価する際には、約 30 年前に研究室の先輩方が行ったセンサス結果を照合している。この度、大学院進学後の 2023 年度調査に援助をいただけることになった。本調査の充実・成功のため、皆様からのご寄付・ご投票を是非お願いしたい。

ポスター発表 P-35

アプリ「ライポス」によるライチョウ情報から生息状況の把握は可能？

○堀田昌伸・黒江美紗子・尾関雅章（長野県環境保全研）・峰村政輝（長野県環境部自然保護課）

長野県では、高山生態系のシンボル、ライチョウの保護保全の一環として、2011 年以降、登山者等からライチョウ情報を収集する事業を行なっています。昨年の発表では、2021 年 7 月から運用を開始したアプリ「ライポス」で収集したライチョウ情報の精度（種同定、年齢や性の識別など）について発表しました。今回の発表では、私たちがライチョウの生息状況を調査している北アルプス爺ヶ岳・岩小屋沢岳で、「ライポス」の情報からライチョウの生息状況がどの程度把握されているかについて発表します。

ポスター発表 P-36*

ホオジロ類（ノジコ）の中継地（中池見湿地）飛来は夜間録音で検知できるか？

○大坂英樹（トリルラボ）・古園由香・出口翔大（福井市自然史博物館）

中池見湿地はノジコの秋の渡りの重要な中継地である。当地でホオジロ類の夜間飛来を検出できないか 2022 年 10 月 10 日から 15 晩、毎晩 12 時間 3 カ所でタイマー録音し、あわせて毎日午前中に標識調査した。地鳴きは実日数 5 日の明け方に見つかり、夜間は見つからなかった。判定は 4 分毎のスペクトログラム 8 千枚の中から声を探し、音を聞き判断した。検知方法の評価では、ホオジロ類が空間的に一様分布し、湿地への飛来総数が放鳥数の 10 倍超、検知半径が 10m とすると、調査期間中に鳴く確率が 10% あれば検出できることから、本調査では夜鳴かず明け方に鳴いたことが示唆された。

ポスター発表 P-37

夜に渡る鳥の目視による種別カウント調査

○原星一

夜間には多くの鳥が渡るが、直接見ることが難しく、どんな種がいつ、どのように渡っているのかなど謎が多かった。近年、目視調査が可能な場所を青森県津軽半島の北端付近で発見し、2022年8月末から11月上旬に毎晩種別のカウント調査を行った。その結果84種約16000羽がカウントされ、渡る鳥の数は天候と月齢の影響を受けている可能性が浮上した。また、ハヤブサやフクロウ類が渡る鳥を捕食する場面や、ヤマシギとハト類がペアを組んで一緒に渡る不思議な現象も観察された。

ポスター発表 P-38*

レーザー距離計を併用した遠隔被写体の実寸測定法の紹介

○合田延寿

被写体を撮影すると同時に、レーザー距離計で被写体までの距離を測定し、被写体の画像寸法と被写体までの距離の2値から、被写体の実寸を測定する方法です。この測定法は「画像の大きさは撮影距離に反比例」との光学的原理を応用しています。

この方法を用いた事例として、日鳥学誌 70(2) 2021 に「技術報告 レーザー距離計を併用したサシバの飛翔時翼開長の測定」を紹介していますが、今回は、大形鳥類(例えば、サギ類やツル類)を対象とした個体識別への実寸測定法による身体データの活用について紹介します。

ポスター発表 P-39

ベランダコミュニケーション～観察から見えてくるヒヨドリの行動とその変化～

○小杉美樹

ヒヨドリ可愛い！の一念で、ベランダでお鳥様専用休憩処を続けていたら、ヒヨドリが地元での繁殖を宣言。それから毎年、巣立ち雛を連れて来るようになり、冬は部屋の中まで縄張りを延長。そんな日々の中で垣間見たヒヨドリの行動や、その変化を書き止めたものを抜粋した、少し不思議な野鳥コミュニケーション実録です。

混合コロニーにおけるカワウ・アオサギ間の非対称な情報伝達

○本多里奈（埼玉県立自然の博物館）、末武かや、東信行（弘前大学）

鳥類では他種の警戒声を利用する行動は一般的である。特に、混合コロニーの構成種は情報を共有しあっているように見えるが、先行研究では情報伝達の方法やメカニズムを十分に検証していない。本研究ではカワウとアオサギの混合ないし単独コロニーでプレイバック実験を行い、種間でどのように警戒声が伝達されているかを調べた。その結果、カワウは一方的にアオサギの警戒声を利用していることがわかった。さらに、カワウはアオサギの行動を見ることで、その音声で「警戒すべき音声であるか否か」を判断している可能性が示唆された。

<自由集会>

自由集会 F-01 1月7日 16:30-18:30

みんなで数えよう～ツバメの全国ねぐらカウント～

神山和夫（バードリサーチ）、天野孝保（長崎大学・院・水環）

子育てを終えたツバメ類は、数千から数万羽がヨシ原に集まり大規模な集団ねぐらを形成します。ねぐらが解消する時期は東京で8月、奈良で9月、そして長崎で11月と西に行くにつれて遅くなっていきます。そこで、各地のツバメ類のねぐらで数が最大になる時期とねぐらが解消される時期を調べれば、東から西へとツバメが渡っていくタイミングを明らかにできるのではないかと考えました。東京と長崎の調査事例を紹介します。ツバメにご興味がある方、ねぐら調査をやってみようという皆さんの参加を歓迎します。

自由集会 F-02 1月7日 16:30-18:30

声や音で鳥と鳥といっしょにいる生き物たちのことを知る

石田健

録音装置や分析ソフトの発達、普及により、鳥やコウモリ、鯨類などの生物音響学が急速に普及・発展している。鳥の声、鳥の出す音談義を学会などで15年あまりやってきて、その都度、鳥音談義、録音談義、分析談義はつきません。みなテーマがけっこう多様でばらけているので、いつもまとまりはありませんけれど、談義がきっかけのヒントを得られる楽しいひとときにまたなればと企画しました。録音をしている人も、聞いているだけの人も気楽にふるってご参加ください。初歩的な質問など歓迎します。

自由集会 F-03 1月7日 16:30-18:30

鳥を対象にしている大学の研究室・研究生活紹介

バードリサーチ

大学の研究室ってどんなところ？これから大学への進学を考えている中学生や高校生でなくても、ちょっと気になる大学の研究室。研究室によってもカラーがあります。鳥を対象にしているも、分類群や研究テーマ、研究アプローチが違い、年間を通じたフィールドワークのスケジュールもちょっとずつ違うかも。今回は8つの研究室に協力してもらい、大学での研究生活を紹介します。

紹介していただく方：西川大生&風間健太郎（早大・人科）、田谷昌仁（東北大・院・生命）、惣田彩可（京大・院・理）、鈴木遼太郎（日獣大・院・獣医保健看護）、佐々木美空（北海道教育大・函館）、江指万里（北大・院・理）、大槻恒介&天野孝保（長崎大・院・水環）、西田澄子（東京都市大・院・環境）

6. 広告・出店者紹介

包み屋 kurumiya [oVice 出店]

生き物柄のアクセサリーをくるみボタンを使って作ってます。野鳥は特に好きなので、オリジナル布柄と既製布柄と合わせて 200 種。アクセサリーの種類は約 40 種と豊富です。



野鳥生活 [oVice 出店]

野鳥生活はバンダーの「たがわ」と、鳥好きな画家「ひるね」で運営しています。鳥類学を一般の方にひろめたいと願っています。



Hure-shuma Reiko [oVice 出店]

野鳥や動物をモチーフにした七宝焼きのブローチを出品します。七宝焼きとは金属の土台にガラスの釉薬を高温で焼き付ける伝統工芸で、ガラス特有の艶やかな輝きが魅力です。



CANCAN (きゃんきゃん)

日本の野鳥をモチーフとして手刺繍で制作しています。緻密で繊細な刺繍たちは、本物志向の方にも自信をもってお勧めできる特別な作品です。世界にひとつだけの作品をぜひ。



築地書館

ティム・バークヘッド著「人類を熱狂させた鳥たち 食欲・収集欲・探究欲の1万2000年」1万年にわたる人間と鳥の関わりを、先史時代から現代まで、英国を代表する鳥類学者が語りつくす。

人類を熱狂させた鳥たち
食欲・収集欲・探究欲の1万2000年
ティム・バークヘッド [著] 黒沢令子 [訳]
予価 3,200 円 + 税 2023 年 3 月刊行
ISBN978-4-8067-1647-1

人類の歴史が始まって以来、私たちの信仰、科学、芸術、資源の源として存在し続けている鳥類。精神と生命を支えてきたその生物を、人はどのように捉え、利用し、そして保護しようとしているのか。

1万年にわたる人間と鳥の関わりを、先史時代から現代まで、英国を代表する鳥類学者が語りつくす。

詳細は築地書館 WEB ページへ

ティアック株式会社・

TASCAM ハイレゾレコーダー

野鳥録音に便利なタイマー録音機能搭載の製品や、野鳥録音のプリセットを備えたタッチパネル搭載レコーダーなど、実際の音源とともにおすすめの製品やお得な情報をご案内。

TASCAM

野鳥録音 特設サイト

録音のレポートや録音に役立つ情報を掲載

音源、動画など更新中!

野鳥録音をハイレゾで!

おすすめのICレコーダーもご紹介

特設サイトからご購入もいただけます

バードリサーチ鳥類学大会 2022 講演要旨集

発行：特定非営利活動法人 バードリサーチ

E-mail： br@bird-research.jp

URL： <http://www.bird-research.jp>
